

新 年 に あ た っ て

財団法人 日本植物調節剤研究協会会長 戸荊義次

除草剤による除草法が、量的にも質的にも労働軽減に貢献したことは甚大である。耕耘・整地はもとより、田植や収穫も機械化により省力がめざましく進んだ。施設園芸における暖房や灌水、果実の選果や包装にも自動化が美事に実現した。真に世をあげて省力技術が普及し、日本農業の様相は一変した。

戦後、日本農業の再建に当たって、従来の多労で低所得の農業から、少労で高所得の農業に転ずることが何にもまして重要な目標とされたのであるが、以後30年にわたって労働生産性の向上、忙しさからの解放、生産費の低減、企業の農業への接近、先進国農業と太刀打ちするために、などを合言葉に、この道一筋に歩いた成果として今日の省力技術の実現は、日本農業の革新とも称すべく、賞讃されてよいであろう。

事実、今日農業の新技术といえは、その開発にも普及にも実施にも、必ず所要の労力・時間が第一の問題とされるように、農家も普及員も技術員も研究員も、労力問題は体内に泌みこんで本能的とも思えるほど敏感になっている。

いっぽう昭和30年代に始まった所得倍増、経済の高度成長は、最小の資本と労力で最大の利潤をあげるとの経済原則を忠実に実現するもので、万人にその明快な論理が受け入れられ、使い捨て、消費は美德、国際分業論などが深慮なく謳歌され、何ごとをなすにも省力は最大の条件で、時には働く者は愚かとさえみられ、働き

蜂、猛烈社員などの揶揄的・自嘲的呼称が流行した。

かくして労少なくして功多きを狙う思想は、国をあげ、一世を風靡し、働くことに気恥ずかしさと格好悪さを、時には罪惡視する風潮さえ生まれてきた。当然の結果として労力不足に拍車をかけ、その理由によって拒否される技術や事務遅滞が増加している。

なるほど開発すべき技術や方式は最小の労力で最大の成果を目標にするのは当然である。しかしそのような技術や方式を作出するためには、最小の労力で可能の筈はなく、最大の労力を傾注してこそ成功の道が開けるのである。何ごと最初から労せずして成果をあげ得るものではなく、ある技術に習熟し、ある知識を修得するまでは常に最大の労力を要するのである。これを裏返せば勉強せずして試験に合格を期すのと同様で、その非は明白である。

試験研究において成果を期すためには、観察や調査に最大の労力を投ずることが必要である。最近の研究報告書をみると結果の報告が主で、その結果を得るに至った中途の経過の調査を欠いたり、不足のために、その由ってきた由来が不明で、理解不能のものが目につく。これも労力節約のためであるなら、反省を要することと思う。

研究者は最小の成果をあげるためにも、最大の労力を傾ける心構えが大切と思う。